

一一一四世紀女性神秘家の〈實際的な叫び〉をめぐる

後藤里菜

はじめに

識字率の低かった西洋中世世界において、〈声〉や〈叫び〉は重要な意味を持った。それゆえ〈声〉や〈叫び〉の果たした役割及び表れ方に注目することは、中世に生きた人々の心性や靈性を読み解く上で有用である。先行研究を概観してみると、〈声〉すなわち口頭伝承を中心とした社会から、文字を中心とした社会への移行には古くから関心が向けられており、中でも克蘭チーの考察が際立っている。さらに、新たな文字社会の担い手として、都市の商人に着目した大黒の研究も今後の展開が期待されるものである。そのような通時的観点からの研究がある一方で、共時

的観点から〈声〉や〈叫び〉の役割を探究する動きもある。代表的なものとして、裁判における声・叫び・噂・悪評等を調べたブローローや、情報伝達手段としての声・叫びに着目したヴェルドンの成果が挙げられる。また、悪徳とされた声（お喋りや冒瀆、嘘など）を神学者の著作等から集めたカサグランデとヴェッキオ及び、罵り言葉を文学的史料・聖人伝から集めたゴンティエの著作も意義深いものだ。ところで、そもそも中世世界全体において、言葉を〈声〉に出すことは特別な効力を持っていた。そのような効力に注目し、神学的考察から説教、預言、まじないめいた呪文までを扱った論文集『中世における言葉の力』からは、言葉と声の役割への近年の関心をうかがい知ることができる。

一方、〈叫び〉のみを扱う研究書は稀だが、例外的なものとして、各々の専門分野の中で〈叫び〉を主題化して扱った論文集『中世において叫ぶこと』⁸⁾がある。同書は法制史から社会史、靈性史まで多岐に渡る文脈から〈叫び〉を論じており、叫び研究の可能性を示していると言えよう。

本稿では以上のような動向をふまえ、研究がより手薄な〈叫び〉に注目し、中でも音声を伴う〈実際のな叫び〉を取り上げたい。中世世界で言葉を〈声〉に出すことが特別な効力を持っていたのと同様に、〈声〉以上の〈叫び〉が発せられることにも特別な意味があつたわけで、その点に注目して研究を進める必要もあると考えられるからだ。むしろん(叫び)と(声)の区別は時に曖昧であるが、その境界に着目することこそが肝要である。

前述の『中世において叫ぶこと』は様々な叫びを扱っているが、本稿では、中世において、より基本的と考えられる〈キリスト教世界〉の叫びに限定して考察したい。すなわち聖性や悪徳、救いや罪と関連して出てくる叫びである。中世キリスト教世界で〈実際のな叫び〉が担った基本的な価値観を確認した後、その価値観に変化を与えたと思われる女性神秘家を取り上げ、〈実際のな叫び〉の表れ方を比

較・検討してみたい。

一・〈実際のな叫び〉とは

今回題目として取り上げたのは〈実際のな叫び〉であるが、その概念を取り上げるまでの経緯に、〈実際のではない叫び〉、すなわち〈内的な叫び〉の存在がある。聖人が神に対して祈る場合には、教父アウグスティヌスや教皇グレゴリウス¹⁰⁾、一二世紀の聖職者・教養人ジェラルド・オブ・ウエルズ¹¹⁾や一三世紀のドミニコ会士ヤコブス・デ・ウォラギネ¹²⁾に到るまで、〈叫び〉と訳されうる単語 *clamare* が用いられることが多かった。ただしグレゴリウスの言葉で言えば「口では黙っている (*ore tacemus*)」、ヤコブスの説教で言えば「口で叫ぶのではなくとりわけ心で (*non enim clamabat tantum ore, sed maxime corde*)」神に聞き届けてくれるように求める、と述べられており、それは口を使つた叫びではなく、沈黙した祈りを示していることが分かる。このように〈沈黙〉の中で神に思いを伝える聖人の姿は聖人伝にしばしば描かれ、沈黙を維持することが聖人の美德の一つとされていたことが分かる。また、前述の『中世に

において叫ぶこと』内の論文で、教区会議決議や典礼定式書から〈呼び〉を探ろうとしたコロンブが述べている通り、¹³⁾中世世界の聖なる空間、すなわち教会や神にまつわる文脈においては〈呼び〉を探すよりも〈沈黙〉を探す方が遙かに容易なのである。それではそのように〈沈黙〉が優位であるキリスト教世界において、〈実際のな呼び〉はいかなる意味を持ったのだろうか。

〈実際のな呼び〉とは、本稿で用いる独自の概念であり、〈実際に口を用いて音声に出す呼び〉という意味だ。今述べた通り、聖人の場合〈呼び〉と訳出できる単語が用いられたながらも実際には祈りである〈表現上の呼び〉がしばしば見られるので、その場合との区別を念頭に置いている。また〈実際のな呼び〉の選定においては、単語と状況説明の二点に着目した。単語では、ラテン語史料については前述の『中世において叫ぶこと』で扱われていた呼びに關連する語句 (*clamare, exclamare, incantare, stridere, vociferari*) に着目し、俗語史料 (今回は後述するリミニのキアラの伝記のイタリア語がこれに当たる) においても叫ぶと訳せる単語 (*exclamare, gridare, urlare*) に注目しながら史料を読解した。なお、個々の単語がいかなる呼びを示すのか、絶対的

な差異を定義するには至っていないためその点は不問とする。また、状況説明への着目と述べたのは、声を発した際の周囲の反応を手掛りとして考察するということである。周囲の反応によって〈表現上の呼び〉ではなく〈実際のな呼び〉だと断定できる場合が多々あるからだ。それでは以下、キリスト教的文脈で〈実際のな呼び〉が有していた価値観を、先行研究をもとに確認した後、その呼びを発展させたと思われる一二世紀後半以降の女性神秘家の伝記を読み解くこととする。

〈実際のな呼び〉にはまず、①本人の意図を伴うものと②本人の意図を伴わないものがある。①の場合は基本的には意味の分かる内容を叫ぶのであり、例えば一二世紀以降のエクセンブラ集には助けを求める俗人の呼びがしばしば描かれている。¹⁴⁾この呼びは〈大声〉との境界が曖昧だが、〈声〉から〈大声〉、そして〈実際のな呼び〉への展開に着目することは有意義なことである。一方②は、内容から更に③意味の分かる言葉を叫ぶ場合と④悲鳴に近い、動物的な言葉を叫ぶ場合とに分けられる。③に関しては福音書やエクセンブラ集、黄金伝説等に見られる、悪魔に憑かれた女性や子供が真実 (身をやつした聖人の正体など) を明らかに

にして上げる叫びが挙げられる。イエスや聖人の聖性があまりに強いため、しがたない俗人が真実を叫ばされるのである。また④の叫びは悪魔憑きや狂人の身ぶりとみなされるのが一般的であった。『コンクの聖女フォワの奇跡の書』（一二世紀）の悪魔払いの場面で、悪魔たちのうちに「ある者たちは人間のように叫び、ある者たちはライオンや豚のようになる」と述べられている。また『ベルナルドウス伝』においても、悪魔憑きは「歯ぎしりをしながら叫んでいる」¹⁷。悪魔憑きの叫びを考察したシャーヴ・マーイルが述べている通り、聖人による悪魔払いとは、悪魔憑きの《叫び》を《沈黙》ないし意味の分かる言葉に変える儀式であるとみなせるほどだ。¹⁸ 狂人の身ぶりに関しては、ラアリーが『中世の狂気』において詳細に述べており、医学書に、狂気という病の症状として叫びが頻出していることが確認できる。¹⁹

以上のように《實際的な叫び》は俗人や女性、子供、悪魔憑き等、聖なる専門家（聖人や修道士、聖職者など）ではない人々と結びつきの強いものであった。聖なる専門家は神の耳にのみ届く《表現上の叫び》を発するもので、外から見れば《沈黙》を保ち、《感情》を制御できることが聖

性のしるしであった。²⁰ しかし聖なる人物であっても女性の場合、この《實際的な叫び》の描かれ方が特異であり、注目すべきであると考えられる。

二、女性的靈性とベギン

西洋中世において、女性が靈的に高度な生活を望んだ場合、修道女になるのが唯一の道であった。ところが一二世紀後半以降、手仕事で生計を立てながら、寡婦や孤児の世話を行い、集団で詩篇を読むなどして、俗世で、より敬虔な生活を送ろうとする女性たちが現れた。これがベギンと呼ばれる人々である。²¹ ベギン成立の要因には、修道院の不足や戦乱による男性人口の不足が挙げられる。しかし何にも増して、《互いに》教え合う、子供を教育する等、《他人との関わり》を靈的段階の進行の契機とする、女性たち特有のやり方の結果がベギンであると考えるのが自然であろう。ちょうど同時期に大規模な異端、カタリ派の活動が見られるため、一般信徒において靈的欲求が高まった時期であり、ベギンもその一つの表れであると考えられる。

ベギンたちは《女性的靈性》を有していたとされる。

〈女性的靈性〉 female spirituality はバイナムが述べた概念で、これまで否定的な価値を伴って女性と結びつけられた〈身体〉をむしろ利用して神と関わりとうとする靈性的ことである。例えば、極度な断食の後、神から〈身体的〉な抱擁を受け恍惚としたり、硬い聖体パンを食べて口から血を流すことで、イエスが磔刑の際に流した血を〈身体的〉に感じたりするのだ。²² 神とのみ対峙するためには感覚や感情は抑制すべきであり、沈黙の内に祈ることが聖性とされた中世世界で、むしろ感覚や体験の面から神に近づこうとするこの姿勢は画期的なものだ。ただし〈身体〉を通じて神を理解しようとしたのは女性だけではなく、広く一般信徒においても、一二・三世紀以降後期中世にかけて強まった傾向であったことにも付言しておきたい。中世末期、一四世紀頃に広まったピエタは、絵画よりも彫刻の形で定着した。それは、彫刻という立体の方が、身体感をそのまま表現できる媒体であり、身体的に共感しようとする靈性が高まっていた時代に合致する表現方法であったからだとしてグラーは述べている。²³ 〈身体〉を通じた共感が一般信徒全般に見られる時期であったからこそ、〈身体〉に重きを置いた女性のやり方も受け入れられたのである。

〈実際のな叫び〉も〈身体〉的な行為である。そこで本稿では、〈女性的靈性〉を有した女性たちにおける〈実際のな叫び〉の表れ方を考察してみたい。ベギンは元來北ヨーロッパで数多く見られたが、その数十年後に、北イタリアでも同様の女性たちが見られた。²⁴ それゆえ両者の比較も念頭に置きながら、初期ベギンとしてその代表たるワニーのマリと、マリ伝の書き手の弟子が伝記を書いたクリステイーナ・ミラピリスを扱う。また、北イタリアの女性として研究が豊富で主要人物の一人であるフォロリーニョのアンジェラと、同時代で叫びと声の点で興味深いリミニのキアラを扱いたい。

三．女性神秘家と〈実際のな叫び〉

まずは初期ベギンの代表とされるワニーのマリ（一一七七一―一二一三）を考察する。伝記の書き手は一二世紀の著名な説教師、ジャック・ド・ヴィトリである。ジャックは異端カタリ派の流行を見るにつけ、司牧の大切さを痛感しながら説教活動に励んでいた人物で、リエージュで司祭として働いた際に、当地のベギンたちの敬虔さ

に感銘を受けたと言う。マリ伝の序文には、彼が教父伝を重要な模範とみなしており、教父伝同様「女性宗教家たち」*mieres religiosae*の伝記を著すことを、自身の使命と考えていたことが述べられている。それゆえマリ伝は、ジャックが理想とするベギンの姿を叙述していると言えよう。

マリ伝の中の〈实际的な叫び〉が出てくる場面としてまず、聖体の真偽を見破る場面が挙げられる。死ぬ間際、マリは食物をほとんど受け付けなくなるが、例外として聖体パンだけは口に入れることができた。その際、聖別されていない聖体パンを与えられた場合には「菌がそのごく一部に触れただけで叫び始め、つばを吐き始め」²⁵、「苦しみゆえに長い間叫んだ」と述べられている。これは、菌に触れるという身体的体験を通じて真偽を知る点で、〈身体〉を通じて真実を知る〈女性的靈性〉が反映された〈实际的な叫び〉であると考えられる。

続いて、やはり同様に「苦しみゆえ」*pro dolore*に上げてしまう叫びがある。苦しみや辛さに耐える「強さ」*fortitudo*は美德であり、マリはその強さを備えていたが、時には肉体的な苦しみから意図しない〈实际的な叫び〉を

上げてしまうことがあった。ある時マリが「麻痺状態で苦しみゆえに叫び、思わず自分の胸を打っていた」²⁷時に、親しい人の一人がマリに同情し、隠れた場所で主に祈ったと言う。これは周囲の人を同情させているので〈实际的な叫び〉であったことが分かる。この時マリは苦しみが軽くなったことで気づき、自分のために祈るのはやめるように伝えた。苦しみを受けることは喜びであり、減じてもらう必要はなかったのだ。

前述の通り、マリ伝は理想の女性宗教家を描いたものであるため、〈感情〉を制御できる、〈沈黙〉を維持できると言った、元来聖人にふさわしい特徴も述べられている。²⁸また、悪魔に憑かれた若い女性を、祈りと断食で救ってやる話もある。悪魔払いは聖人の聖性を証明する行為として一般的であり、聖人伝でしばしば語られているため、これはマリの聖性を伝統に沿った形で示す話であると言える。ただし、聖人伝で描写される悪魔憑きの大半は〈实际的な叫び〉と激しい身ぶりを伴うものとして描かれていたのに対して、マリ伝に出てくる悪魔憑きの女性は、悪魔によって「精神が貶められ、主の祈りも使徒信経も言うことができなかつたし、自分の罪を告解することも拒否した」²⁹と述

べられている。祈りの言葉や告解を〈声〉に出すことは信徒にとつて重要であり、そのような〈声〉を出せないことが、罪深い、悪魔に憑かれた状態を意味するというのは納得できる話である。しかし激しい悲鳴のような〈実際のな叫び〉によつてではなく、祈りの言葉を言えない、告解できないと言つた形で悪魔憑きの症状を示すのは、一二世紀後半から一三世紀以降に顕著な特徴であり、これは、救いに到るために〈声〉が以前にも増して重要になる傾向を表しているのではないかと思われる。この点については後述する。ともかくもそのような悪魔憑きの女性に助けを求められたマリは、四〇日間断食し涙とともに祈ることによつて、救つてやつたのである。

以上のように、〈感情〉を制御し、〈沈黙〉を維持していたマリだが、死ぬ間際になると主のもとへ行ける喜びの〈感情〉を顕わにし、叫ぶ様子が描かれるのだ。「喘ぎ、ため息をつき、欲求ゆえに叫び、いわば猶予は耐えられないかのように、主を抱き締めて『主よ、私を置いて行かないでください。私はこれ以上ここにいたくないのです。私は家に帰りたいのです』³¹と訴えている。そして「自分の外に引つ張られている間叫び、その顔には火が見えるよう

だった³²」と言う。

このように喜びのあまり叫び続けるマリの様子を見て修道院長は、俗世の人々がマリの声に呆れたり、狂人扱いしたりすることを恐れた。喜びの叫びは一般には聖なる意味に解釈されなかつたのだ。つまり「俗世の子ら」*seculi*や「苦しみの子ら」*fili doloris*は、「窮境や苦しみみえ」*prae angustia vel dolore*に叫んでも不思議がらないが、心が満たされ「喜びゆえ」*prae gaudio*に叫ぶなどと言うと、驚きいぶかしがるのである。しかし「喜びの子ら」*fili gaudii*がマリの喜びの叫びを聞いた場合には「あらゆる謙遜の念とともに、その神聖さにある神の偉大な業を讃える³³」と言う。ここで、条件付きであれ、〈実際のな叫び〉に神の業を読み取っている点は注目すべきである。また、本当に死ぬ間際になると、マリは「我々に向かつて喋ることも、我々に目を向けることもなく、目はじつと天国を見つめ³⁴」ており、外に〈声〉すら発しなくなる。以上のようにマリは〈沈黙〉という聖性を有しつつも、〈女性的靈性〉を発揮して〈実際のな叫び〉を発する場合が例外的に見られ、更に死ぬ間際には「喜びゆえ」の〈実際のな叫び〉を神の御業として発していることが分かる。最後には

再び沈黙に伏しているが、その直前の「喜びゆえ」の《実際のな叫び》は、意図も内容も伴わない《実際のな叫び》が聖なるものとして解釈されるようになった新たな事例であり、注目すべきものである。

続いて、クリステイーナ・ミラピリス（一一五〇—一二二四）の伝記を見てみたい。書き手はジャツクの弟子トマ・ド・カンタンブレで、後にドミニコ会士となった人物である。クリステイーナはいわば一度死んであの世を見て、後に生き返る奇蹟を遂げた聖女である。その生い立ちや身ぶりが特異であるため、伝記内容の真偽に疑問が投げかけられ、研究対象としてそぐわないとされたこともあった。しかし悪魔憑きと聖女の身ぶりを研究するニューマン³⁵やクリステイーナ伝の英訳者キング³⁶が述べるように、クリステイーナが本当に伝記通りに生きたのかを議論するよりして読むことの方が有益であろう。最終的には聖なる女性として描かれていることから、そのような行動が聖なる女性のものともみなされ得たことは確かであり、そこに《実際のな叫び》がいかに登場するかを見ることも有用なことだ。それでは内容を見てみよう。クリステイーナは病気で亡く

なって煉獄と地獄へ行き、苦しんでいる魂たちを目にした。その後神のもとに着き、そこにどまるか、魂たちの苦しみを和らげるため現世に戻って苦しみを肩代わりするとともに、人々を回心させる役に当たるか、と問われ、後者を選んだ結果、生き返ったのだ。

クリステイーナの《実際のな叫び》として、まずは施し物の真偽を見破ったり、遠くの出来事を感じたりして上げる叫びがある。施し物が「不正な手段で」*injuste* 得られた物の場合、ヒキガエルの内臓や蛇の腸を飲み込んでいるかのようであり、それらを食してしまつた時には「おおキリストよ、なぜ私にこのようなことをするのか。なぜこのように私を十字架にかけるのか」と「お産の時のように叫んだ」と言う。因みにこのカエルや蛇は地獄における食事であることがハイステルバッハのカエサリウスの『奇蹟に関する対話』³⁷などから読み取れるため、地獄の罪人の罰を肩代わりする一環として、体験したことだと考えられる。また、遠くで起きた戦いで多くの人が殺されたことを察知して、「お産の時のように叫んで言った。『おお！ おお！ 空が剣と血で一杯なのが見える』³⁸と述べられている箇所もある。クリステイーナの場合、「お産の時のように」

quasi parturiens という言葉が付されている点が特徴的である。出産の際の女性の声は確かに相当なもので、悲鳴に近い（実際のな叫び）をよく表現している。

さらに、自ら煉獄での罰のような行為に走り、叫んでいる。例えば「パンが焼かれている、火を吐いている窯に入った。そして我々の誰かのよう炎で拷問にかけられた。その苦難ゆえ恐れさせるほどに叫んだ」とあるように、進んで火炙りの刑を受けているかのようだ。このように自らパン焼き窯に入ったり、沸騰している湯に入ったりして叫び声を上げる様子から、姉たちはクリステイーナを悪魔憑きとみなし、繰り返し鎖で縛って閉じ込めた。だがクリステイーナは神の加護の下にあつたため、閉じ込められて弱つても、乳から聖なる油が出てそれを固くなったパンにつけて食べることで、生き延びることができた。その奇跡によつて最終的には、姉たちや周りの人々にも聖なる女性とみなされるに至つたと言う。やがて徐々に奇異な行動も落ち着き、最後には沈黙の状態に至つて（声）も発しなかつた。（実際のな叫び）を発しないのは勿論、姉妹や修道女たちと語るために座することもはやしやうとしなかつたと述べられている。以上のようにクリステイーナの場合

には、煉獄や地獄での罰を肩代わりするべく現世に戻つてきたため、罪人が罰を受けて上げる（実際のな叫び）が表現されている。進んで苦しみを体験し、叫ぶこと自体が肩代わりの一環としての役割を果たしており、それが達成された時、沈黙に至つたのだと考えられる。また、施し物の真偽などを明らかにする際、マリの場合と同様の、（女性的靈性）が発揮された（実際のな叫び）を見ることができた。

続いて、フォリーニョのアンジェラ（一二四八一—一三〇九）を見てみたい。アンジェラは結婚し子供を産み育てた女性で、回心した具体的な要因は述べられていないが、他の都市との戦乱や、当地で盛んであつたフランシスコ会の説教などが影響を与えたのではないかと言われている。⁽⁴³⁾ 一二八五年頃回心し、親戚でフランシスコ会士でもあつた兄弟アルナルドに総告解をした。その後は苦行・黙想および、らい病患者の世話などに身を捧げて敬虔な生活を送るようになり、一二九一年に夫、子供、母親が亡くなると、フランシスコ会第三会に入会した。

アンジェラは第三会の仲間的女性たちと共にアッシジへ向かい、その道中で聖霊の声を聞く。しかし聖堂に着いた

際にその声が消えたため、激しく叫んだ。これは〈実際のな叫び〉であり、人々はアンジェラが狂ったか悪魔に憑かれたと考えた。アルナルドは、叫びの原因が分かるまで二度とアッシジに来ないようアンジェラを諭した。その後アルナルドが様子を見に訪れた際、アンジェラの内なる体験の話聞き、聖性を認め書き記すことにしたと言ふ。それが伝記『記憶』*Memoriale*である。もう一つ『教え』*Instrukiones*があるが、こちらは幾人かの、逸名著述家によつて書かれたとされるため今回はアルナルドによる『記憶』のみを扱う。『記憶』は内容を逐一アンジェラに確認し、忠実に表現するために俗語に近いラテン語で書かれたと言ふ。魂が靈的に高まる過程が段階的に描かれており、最初の一九段階が、以前に起こった出来事を遡つて叙述している一方、その後の七段階は起こる度にすぐに報告され、記述されたものである。

アンジェラの場合、〈声〉から〈実際のな叫び〉へと繋がる様子が見て取れる。他の信徒同様、アンジェラにとつても祈りの言葉を唱えることが日課であった。唱えることで内的な理解が深まり、靈的段階の進行も促されたのである。第一八段階では、祈りを唱える際、心の中に「神の愛

という火」*ignis amoris Dei*が激しく燃えていたため、跪拝やその他の贖罪行為を行つても全く疲れなかったことが述べられている。その後で〈実際のな叫び〉と思われる叫びが出てくる。その火が大きくなり「神について話しているのを聞いた時、私は叫んだ。たとえ誰かが私を殺そうとして斧を私の上に振り上げて立つたとしても避けられなかっただろう」⁴⁵。また、アンジェラは受難の絵を見ると耐えられなくなり、「熱が私を襲い、私は病氣になった。だから私の仲間の女性が、私から受難の絵を隠した、あるいは隠そうと努めた」⁴⁶と述べられている。その後すぐに第一九段階の説明に入り、「この叫んでいた時期の間に」⁴⁷最初の慰めを得るに至つたと書かれていることから、第一八段階の身体的な反応には〈実際のな叫び〉も含まれていたと考えられる。続いて第一九段階に入るとアンジェラは、「これまでに経験したことのない大きな慰め」⁴⁸を得る。その際には喜びが満ちており「その後地面に倒れ、喋る言葉を失った」⁴⁹とあるため、それ以前の段階では〈声〉にも出しながら祈っていたのが、靈的に高い段階に達して、外に向かつて声を発しなくなったのだと考えられる。

しかし、神秘家の靈的段階を述べた著作にしばしば見ら

れる通り、アンジェラの場合も必ずしも論理的・一方向的に進歩してゆくばかりではない。後退なのか進歩なのか曖昧な段階が繰り返し叙述される。後の七段階のうち第四段階になると、アンジェラは神の存在が感じられず苦しんでおり、自分の罪があまりに多く深いので口に出すことができないうように思われたと言う。また、神を讃えたり祈り続けたりすることもできず、四週間以上苦しんでいたと述べられている⁵⁰。告解や祈りを口に出せないのは、先に見たワニーのマリ伝でマリが助けた悪魔憑きの女性の症状と同じである。伝記に書かれるような〈聖人〉たる主人公アンジェラがその症状で苦しんでいるとはどういうことだろうか。その要因を考えてみると、第一に伝記作者の意図の相違が挙げられる。マリ伝の場合は、正統の範囲内で敬虔な生活をする模範的な女性としてマリを描こうとした。そのため悪魔憑きの女性を救う場面が描かれている。一方、アンジェラの伝記は、その様子をできる限り忠実に伝えることを意識している。それゆえ苦しんでいる際の描写、一見聖なる人物とみなされない描写も削除されなかつたのである。第二に、女性神秘家の霊性の変化を示していると言える。ワニーのマリが幼い頃から敬虔な女性だったのに対し

て、アンジェラは大人になり子供を産み育てた後に回心した、いわば、より普通の俗人に近い女性である。修道女にならない点では同様だが、マリがより聖人や宗教家に近い立場だった一方、アンジェラは、より俗人に近い立場から辿ることのできる敬虔な道を示したのだ。そしてアンジェラのように、より俗人に近い立場の女性が聖なる道を模索する際、〈声〉に出すことが重要となっていたと考えることができる。その重要性はこの後の箇所からも覗える。つまり、そのように口に出せず苦しみ、肉体的にも病に伏して寝ていると、起きて跪いて祈るようにと神に言われるのである。アンジェラがその声に従ったところ、喜びで軽くなり、病で苦しんでいたかのようなようになった。続いてさらに神から指示される。「この言葉を言いなさい、『聖三位一体と聖母マリアに称賛と祝福あれ』⁵¹。そこで言われた通りにその言葉を繰り返すと、アンジェラは大いなる「喜び」*laetitia*と「悦楽」*delectatio*で満たされたのである。言葉を声に出すことによつて神との繋がりを再確認し救われている。

さらに、後の第五段階になると、「魂は喋らないし、外に向かつて喋れたのかも分からない。しかし魂は内には

喋り叫んで」⁵²いた、と述べられている。ここで「外に」extra「内に」intusという言葉が明示的に表れるため、内的な叫びへの移行が覗える。しかし、後の第六段階では再び神に見捨てられたかのように感じ、自分の魂が悪魔に吊るされている様子を幻視して叫んでいる。「私は口で叫び、神よと言ひ、幾度も神に叫び、ほとんど絶え間なく、わが息子よ、わが息子よ、私を見捨てないで、わが息子よ、と神に言っていた⁵³」と述べられている。「口で叫び」vociferor oreとは、再び〈実際のな叫び〉を上げていたことを表しているのではないだろうか。以上のように、アンジェラの場合には祈りの言葉を実際に〈声〉に出すことが、救いや内的な高まりと繋がっていることが分かる。霊的に高い段階に到るほど内的な声や叫びのみになっているが、神から見放されたかのように感じる段階では、再び口で叫びを上げている。(〈実際のな叫び〉と内的な叫びが相互に影響し合いながら、徐々に内的な叫びのみの状態へと進んでいったのである。

最後に、リミニのキアラ(一二六〇頃—一三二五)を扱う。キアラはアンジェラとほぼ同時代の女性で、その伝記はリミニのフランシスコ会士によって書かれたとされるが、著

者の詳細は不明である。写本に付されたタイトルが「虚栄心の強い全ての女性たちが見習うべき例⁵⁴」となっていることから、模範的な女性として描かれたものであることが分かる。ベギンたちのように周りに同様の志を持った女性たちが集まっており、「聖人や聖女、断食や節制、称えるべき模範について」互いに語ることで慰めを得ていたと言う。キアラは、もともとは裕福な夫を持ち、二四歳までは肉欲と富にまみれた生活を送っていた。しかし、フランシスコ会の教会に足を踏み入れた際、「キアラよ、神を讃え、記憶するため、主禱文を唱えなさい。そして他のことは考えないように！」⁵⁵との声を聞く。その後、言われた通りに折に触れて一人になり主禱文を唱えることで、霊的段階を高めた。最終的には聖母マリアが現れ、キアラを回心させ、キリストを新たな夫とさせた。その後は徹夜や断食などの激しい悔悛生活を続けることになり、その様子が伝記で綴られている。

初めに主禱文を唱えるように指示されていたことから分かる通り、キアラにとっては日常的な祈りの〈声〉が重要な役割を果たした。ここに、アンジェラに見られたのと同様の、〈声〉に出すことで救いへ繋がってゆく道筋が見

てとれる。「使徒信經をすべて唱え、主禱文を百回以上唱えると、号泣し、叫んで言った、『おお、わが哀れなる魂よ、罪の中でキリストをいかに大きく傷つけたことか！』とあるように、祈りの（声）が（実際のな叫び）へ繋がっている。さらに、キアラの場合、過去に裕福な夫とともに罪深い生活を送っていたためか、自身の悔悛の思いをしばしば口にしている。週に四、五回告解し、夜には都市の教会をまわって、涙を流しながら自分の罪をうめき祈った。その際（実際のな叫び）を伴っていたようで、「神に向かつて大きな声で叫びながら」と述べられているのだが、その叫びがあまりにうるさく聖務日課の妨げになるので、聖堂参事会員や隣人たちに、黙るか出て行けと言われるたと述べられている箇所もある。また、フランシスコ会士の中には、キアラが「オオカミのように吼え、蛇のようにシューと音を出し、牛のようにうるさく」ため「人の姿をした悪魔である」と言う人がいた。しかしキアラは、キリストのために責められるのなら構わなかったのである。

また、キアラもアンジェラ同様、受難に共感している。イエスの十字架での受難の全てを思い出し、「大きな叫び声を上げ、涙をあふれさせた」。その際、「我々罪人たちの

ためにそのような責め苦を受けようとしたイエス・キリストとその甘美なる母を思つて」いることは勿論だが、その後「彼女自身が犯した重い罪について思い、涙をよりいっぱいのために泣いた」と述べられているため、自身の罪深さへの意識がやはり強いことが分かる。また、最後には無垢な状態に戻ったかのようにであり「誰とも関わらず何も喋らなかつた」と言う。以上のように、キアラの場合アンジェラ同様、祈りの声が内的な高まりと結びつき（実際のな叫び）になる例が見られる他、悔悛の思いを発することと（実際のな叫び）とが強く結びついていることが分かる。この叫びは相変わらず悪魔憑きとみなされ得たが、全体としては他の女性が見習うべき聖なる女性として描かれているため、悔悛の（実際のな叫び）も過程として必要なものだったのではないか。

おわりに

以上四名の女性神秘家を（実際のな叫び）の観点から考察した。第一に、全員が一度は悪魔憑きや狂人とみなされていた。これは、たとえ（身体）への見方が変わる一二世

紀後半以降であっても、意図や内容を伴わない〈実際のな叫び〉は悪魔憑きや狂人と結び付けられ続けたことを示している。第二に、〈実際のな叫び〉を抑制しようと周囲が働きかけている様子が見られた。マリの苦しみの叫びに親しき仲間が同情し、その苦しみを和らげるように祈っていた。アンジェラの場合も、仲間が心配して磔刑図を隠した。

しかし本人たちは、そのように助けられることを望んでおらず、おかしな目で見られることも厭わないようだ。この点はクリステイーナやキアラの場合も同様で、悪魔憑きとみなされようとも、神のためになつていゝのなら構わないと言ふ。この態度は何を意味するのだろうか。

聖人の身ぶりにふさわしいのは内的叫び（沈黙）である。今回扱った女性たちも〈聖女〉とみなされているため、最終的には沈黙に至っている。ただしその到達の仕方が男性の聖人とは異なるのではないか。つまり、身体を用いた〈実際のな叫び〉を伴う過程を経ることで内なる叫びに到達するのが、女性たちなりのやり方だったのである。悪魔憑きや狂人と誤解されることも、単なる誤解ではなく、そのようにみなされることも含めて、内的な叫びに到るまでの道程だったのではないだろうか。

最後に、初期ベギンと、イタリアの女性たちとの相違について述べたい。マリの場合には、喜びの〈実際のな叫び〉に聖なる意味を付与した点が画期的であった。内に享受した神の恩寵を、外的に、身体的な形で表現するやり方が認められたのだ。クリステイーナの場合は、まさに〈身体〉をもって罪の贖いを助け、その際、煉獄・地獄が罪人たちの〈叫び〉に満ちた世界であつたのと同様な〈実際のな叫び〉を発した。以上の二者が〈身体〉を通じて神から〈受け取り〉、〈実際のな叫び〉で表現したのに対し、後半のイタリアの女性神秘家二者は、〈身体〉を通じて〈実際のな叫び〉で自らの思いを神に〈送り〉続けたように見える。この後者の〈実際のな叫び〉は〈声〉と地続きになつており、彼女らは〈声〉や〈大声〉、〈実際のな叫び〉を繰り返しながら、霊的段階を進んで行くやり方を見出し、体現していたようだ。さらにキアラの場合、悔悛の思いを訴え続けている点が特徴的であつた。告解は非公開・耳打ちで行われていた時代だが、自らの罪深さを大声で日々繰返し訴えることが、悔悛の道を進むことそのものになつていたのである。自分の罪を大声で言うことで救われる俗人の話は一三世紀のエクセンプラ集にも登場する。

また、当時のイタリア都市では、鞭打ち苦行団等の〈声〉や〈叫び〉を中心に活動した宗教運動が盛んになっていた。それゆえ、より積極的に〈声〉と〈実際のな叫び〉を上げながら聖なる世界に踏み込むやり方は、女性神秘家に限らず栄えたのではないかと思われる。

以上のように、〈実際のな叫び〉を軸に置きつつ〈叫び〉と〈声〉に注目することで、中世キリスト教世界の心性や靈性のあり方を、これまでにない形で明らかにできると考えられる。より広い分野に渡る調査と探究を今後の課題としたい。(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

註

- (1) M. T. Clanchy, *From Memory to Written Record: England 1066-1307*, London, Edward Arnold, 1979.
- (2) 大黒俊二『声と文字』東京、岩波書店、二〇一〇年。
- (3) Alain Boureau, "Une parole destructrice: la diffamation. Richard de Mediavilla et le droit individuel au péché", in *Un Moyen Age pour aujourd'hui : mélanges offerts à Claude Gantvard*, Julie Clause, Olivier Matteoni & Nicolas Offenstadt (dir.), Paris, Presses universitaires de France, 2010, pp. 306-314.
- (4) Jean Verdon, *Information et désinformation au Moyen Age*, Paris, Perrin, 2010.
- (5) C. Casagrande & S. Vecchio, *I peccati della lingua : disciplina ed etica della parola nella cultura medievale*, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 1987.
- (6) Nicole Gonhler, "Sanglant coupau!", "Orde ribande!": les injures au Moyen Âge, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2007.
- (7) N. Bériou, et al. (eds.), *Le Pouvoir des mots au Moyen Age*, Turnhout, Brepols, 2014.
- (8) Didier Lett & Nicolas Offenstadt (dir.), *Haro ! Noël ! Oyé ! : Pratiques du cri au Moyen Age*, Paris, Publications de la Sorbonne, 2003. 以下、*Pratiques du cri* ヲ参照。
- (9) Saint Augustin, *Enarrationes in Psalmo*, Turnhout, Brepols, 1956, Ps. 4, 5, "Interno et incorporeo clamare"; 荒井洋一『アウグスティヌスの探究構造』東京、創文社、一九九七年。なお、以下、下線は引用者が付した。
- (10) *Glossa*, PL 113, col.225: "si vero corde desideramus, ore tacemus, tacentes clamamus. Unde in eremo cum populus vocibus perstreperet, et Moses a strepitu verborum tacel-

- silens auditur, et dicitur ei : *Quid clamans ad me ?* In desiderio enim clamor secretus non pervenit ad aures humanas, divinas replēt.” 44 PL 213 214 (S) 214 215 430° *Patrologiae cursus completus, Series latina*, J.-P. Migne (ed.), Paris, 1844-64.
- (11) Gerald of Wales, *Gemma ecclesiastica*, J. S. Brewer (ed.), in *Giraldi Cambrensis opera*, 2, Rolls Series 21, London, Longman, 1862, II, 19, pp. 259-260.
- (12) Pascal Collomb, “*Vox clamantis in ecclesia*, contribution des sources liturgiques médiévales occidentals à une histoire du cri”, in *Pratiques du cri*, pp. 117-130, 120 ; Jacques de Voragine, *Sermones aurei in omnes Quatragessimae Dominicas et ferias*, t. 1, Clutius, Paris, 1760, p. 42 a : “non enim clamabat tantum ore, sed maxime corde, juxta illud : ‘Clamavi in toto corde meo, exaudi me Domine.’”
- (13) Pascal Collomb, *art. cit.*, p. 117.
- (14) *Liber exemplorum ad usum praedicatorum*, A. G. Little (ed.), Abertoniae, Typis Academicis, 1908, pp. 43-45 ; Jean Gobi, *La Scala Caeli de Jean Gobi*, Marie-Anne Polo de Beaulieu (ed.), Paris, Edition du Centre national de la recherche scientifique, 1991, pp. 301-302 44 45°.
- (15) 福音書に見られる叫びに關しては以下を參照。Pascal Collomb, *art. cit.*
- (16) *Liber miraculorum sanctae Fidis publicé d’après le manuscrit de la Bibliothéque de Schlestadt*, A. Bouillet (ed.), Paris, Alphonse Picard et Fils, 1897, p. 143 : “alii humano clamantes, alii leonum ac porcorum more rugientes” ; *The Book of Sainte Foy*, Pamela Sheingorn (trans.), Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1995, Book 3-8, p. 156.
- (17) Arnold of Bonneval, *Vita prima Bernardi*, 2.11, c. 275 : “Personam freudentem dentibus et stridentem”
- (18) Florence Chave-Mahir, “Les cris du démoniaque Exorciser les possédés dans les récits hagiographiques des XIIIe et XIIIe siècles”, in *Pratiques du cri*, pp. 131-140.
- (19) Muriel Laharie, *La folie au Moyen Age : XIe-XIIIe siècles*, Paris, Léopard d’Or, 1991, pp. 117-114.
- (20) 例えは黄金伝説にはアルセニウスやアガトンなど沈黙を守る聖人も登場する。Jacobus de Voragine, *Legenda Aurea con le miniature del codice Ambrosiano C 240 inf.*, Gianfranco Agosti et al. (trans.), Firenze, Sismel, edizioni del Galluzzo, 2007, p. 1382.
- (21) ベキエンに關しては以下をほかに參照の研究がある。Ernest W. McDonnell, *The Beguines and Beghards in Medieval Culture : with Special Emphasis on the Belgian scene*, New York, Octagon Books, 1969 ; Walter Simons, *Cities of Ladies : Beguine Communities in the Medieval Low Countries, 1200-1565*, Philadelphia, Pa. University of Pennsylvania Press,

2001.

- (22) C. W. Bynum, *Fragmentation and Redemption: Essays on Gender and the Human Body in Medieval Religion*, New York, Zone Books, 1991, pp.53-117, 181-238.
- (23) Johanna E. Ziegler, "The Virgin or Mary Magdalen? Artistic Choices and Changing Spiritual Attitudes in the Later Middle Ages.", Paper at the Holy Cross symposium, "THE WORD BECOMES FLESH. Radical physicality in Religious Sculpture of the Later Middle Ages", 1985.
- (24) Herbert Grundmann, *Religious Movements in the Middle Ages*, Steven Rowan (trans.), Notre Dame, Ind. University of Notre Dame Press, 1995, p.76; *Complete Works Angela of Foligno*, Paul Lachance (trans.), New York, Paulist Press, 1993, "Preface", Romana Guarneri, p.5.
- (25) Jacques de Vitry, *De B. Maria Oigniacensi*, in *Acta sanctorum*, Jean Baptiste Carnandet et al. (eds.), editio novissima, June tom. 5, Paris, Victorem Palme, 1867, vol. 2, cap.12, 105; "Cumque modica pars dentes ejus attingisset, coepit clamare, conspuere"; Cf. *The Life of Marie d'Oignies*, Margot H. King (trans.), Toronto, Peregrina Publishing, 1987.
- (26) Jacques de Vitry, *De B. Maria Oigniacensi, cit.*, vol. 2, cap.12, 105; "diu prae dolore clamasset"
- (27) *Ibid.*, vol. 2, cap. 5, 74: "cum prae dolore paralysis clamaret. & pectus suum tundere cogeretur"
- (28) マリは節度が保たれるために歡喜の思い(すなわち感情)を調節している (vol.1, cap.13, 39)。また、十字架称賛の祝日から復活祭まで沈黙していたため、主がその沈黙を受け入れ、煉獄に行かずに天国に行けることになったと述べられている (vol.1, cap.11, 38)。
- (29) Jacques de Vitry, *De B. Maria Oigniacensi, cit.*, vol.1, cap. 9, 31: "nec Orationem Dominicanam, nec Credo in Deum dicere poterat; peccata vero sua confiteri nolebat."
- (30) Barbara Newman, "Possessed by the Spirit : Devout Women, Demoniacs, and the Apostolic Life in the Thirteenth Century", in *Speculum*, 73, 1998, pp. 733-770; Florence Chave-Mahir, *art. cit.*
- (31) Jacques de Vitry, *De B. Maria Oigniacensi, cit.*, vol.2, cap. 10, 96; "anhelabat, suspirabat, prae desiderio clamabat, quasi dilationis impatiens, dum Dominum amplexaretur; Nolo Domine, quod sine me recedes. Non hic amplius volo morari: ire domum desidero."
- (32) *Ibid.*: "dum extra se clamans traheretur, quasi ignea in vultu videbatur"
- (33) *Ibid.*: "cum omni humilitate Dei magnolia in Sanctis suis venerantur"
- (34) *Ibid.*, vol.2, cap. 13, 107: "loqui nobis non valuit, nec oculos

- suos ad nos convertit, sed fixis immobiliter in caelum oculis”
- (35) Barbara Newman, *art. cit.*
- (36) “Introduction”, in Thomas de Cantimpré, *The Life of Christina the Astonishing*, Margot H. King (trans.), Toronto, Peregrina Publishing Co., 1999, pp.5-9.
- (37) Thomas de Cantimpré, *The Life of Christina the Astonishing*, *cit.*, p. 46: “O Christe, quid agis mecum? Sic quare me crucias?”
- (38) *Ibid.*: “clamabat quasi parturiens”
- (39) 高利へ財産を貯めた父親が、死後現世に来てあの世の食べ物や戸に吊るして帰る話で、「ひもを蛇や山のように吊るしてあった」と述べられている。Cf. 阿部謹也『西洋中世の罪と罰』東京、弘文堂、一九八九年、一三二頁。Caesarius von Heisterbach, *Dialogus miraculorum: Dialog über die Wunder*, Nikolaus Nösges & Horst Schneider (trans.), Turnholt, Brepols, 2009, p.2216.
- (40) Thomas de Cantimpré, *The Life of Christina the Astonishing*, *cit.*, p. 52: “clamabat quasi parturiens atque dicebat: Heu, heu! Video aerem gladius et sanguine plenum.”
- (41) *Ibid.*, p.30: “Ingredebaturque cilbanos ignivomos, ad coquendum panes paratos, cruciabaturnque incenditis velut aliquis nostrum, ita ut horrifice clamaret prae angustia”
- (42) *Ibid.*, p.76: “Ad colloquium cum sororibus et religiosis, sicut ante consueverat, sedere nolebat”
- (43) *Le livre d'Angèle de Foligno d'après les textes originaux*, Jean-François Godet (trans.), Grenoble, J. Millon, 1995, pp.12-13.
- (44) Catherine M. Mooney, “The Changing Fortunes of Angela of Foligno, Daughter, Mother, and Wife”, in *History in the Comic Mode: Medieval Communities and the Matter of Person*, Rachel Fulton & Bruce W. Holsinger (eds.), New York, Columbia University Press, 2007, p.58.
- (45) *Il libro della beata Angela da Foligno*, Ludger Thier & Abele Calufetti (eds.), Grottaferrata, Rome, Editiones Collegii S. Bonaventurae ad Claras Aquas, 1985, p. 152: “si audiebam loqui de Deo stridebam; et si aliquis sterisset cum secure super me ad interficiendum me, non potuissem abstinuisse.”
- (46) *Ibid.*: “capiebat me febris et infirmabar, unde socia mea abscondat a me picturas Passionis et studebat abscondere”
- (47) *Ibid.*: “infra istud tempus stridendi”
- (48) *Ibid.*: “maior consolation quam unquam fuissem experta”
- (49) *Ibid.*: “iacui et predidi loquebam”
- (50) *Ibid.*, pp.264-266.
- (51) *Ibid.*, p. 264 : “Dicas verba ista ‘Laudata et benedicta sit sancta Trinitas et sancta Maria Virgo Mater.’”
- (52) *Ibid.*, p.300 : “Et ipsa non loquebatur et nescit quod potuerit loqui extra; sed anima louebatur intus, clamans”

- (33) *Ibid.*, p.340 : “et vociferor ore dicens *Deo* et clamans *Deo* multotiens, quasi sine intermissione dicens *ei: Fili mi, fili mi, non me dimittas, fili mi!*”
- (34) Rimini, Bibliotheca del Seminario vescovile, ms. 144: “La vita della beata Chiara da Rimini, la quale fo exemplo a tuete le donne vane”
- (35) Jacques Dalarun, “*Lapsus linguae*”: *la légende de Claire de Rimini*, Spoleto, Centro italiano di studi sull’alto medioevo, 1994, p.30: “de varii sancti et sancte, digni, abstinentie, laudabili exempli!”
- (36) *Ibid.*, p.21 : “Sforzate, Chiara, de dire uno Pater nostro a laude et memoria de Dio et altro non pensare !”
- (37) *Ibid.*, p.26 : “Poi diceva tuoto el Credo et più che cento volte el Patre nostro, con gran copia de lacrime, gridando: « O malivola anima mia, grande offesa hai facta a Christo continuando nel peccare ! »”
- (38) *Ibid.*, p.29 : “con alta voce exclamando a Dio”
- (39) *Ibid.*: “ li dixero ch’ella se temperasse ovvero facesse et, non lo facendo, ella di quello loco partisse.”
- (40) *Ibid.*, p.35 : “urla como lupo, ciufola como serpente et mughia como bò”
- (41) *Ibid.*: “el demonio che sotto specie de humilità v’inganna”
- (42) *Ibid.*, p.31 : “con alto grido et molta copia de lachrime”
- (43) *Ibid.*: “havendo compassione a Jesu Christo, che per noi peccatori tali supplicii volesse sopportare, et così a la sua dolcissima matre.”
- (44) *Ibid.*: “Et considerando i gravi peccati che lei haveva comesso, con più abundantia de lachrime gli ochi piangevano.”
- (45) *Ibid.*, p.53 : “Né praticava con le persone, né parlava”
- (46) Etienne de Bourbon, *Anecdotes historiques*, A. Lecoy de la Marche (ed.), Paris, 1877, 183, p.160 ⁴⁴ 45°